

立命館大学

# 国際平和ミュージアムだより

KYOTO MUSEUM FOR WORLD PEACE, RITSUMEIKAN UNIVERSITY

Vol.25-3 (通巻 73号) 2018.3.2 発行



弁当箱 (11.3cm × 18cm × 5.5cm)  
P1 スポット ミュージアムの収蔵品 70 に関連記事

## Contents

01	スポット ミュージアムの収蔵品 70	弁当箱
03	巻頭つれづれ	「時分の花」と「時の驕り」 — 平和の意味と平和博物館の意義
05	平和教育研究	公開シンポジウム「沖縄戦の後を生きる」
07		研究プロジェクト 「平和博物館における戦争体験継承のための 展示モデル構築」
08		平和のための博物館・市民ネットワーク特別講演会
09	運営委員リレー連載	
11	事業報告	

## 弁当箱

2017年12月、ICAN（核兵器廃絶国際キャンペーン）がノーベル平和賞を受賞しました。核兵器廃絶に向け世界中に働きかけてきた活動、国連における「核兵器禁止条約」採択への貢献が評価されての受賞です。国際社会に向けて唯一の被爆国と自認するものの条約署名がなされない日本の状況下であり、被爆者をはじめ核兵器廃絶を願う多くの人々を勇気付ける出来事でした。

授賞式ではカナダ在住の被爆者によるスピーチがあり、広島と長崎の市長も授賞式に出席しました。また、2005年に設立され、毎年ノーベル平和賞に関連した展覧会を開催しているノーベル平和センターでは、これにあわせて「BAN THE BOMB」のタイトルで、ICANの活動を紹介する展覧会が始まりました。

この展覧会の見所の一つは、被爆資料の展示で、その中に当館が所蔵する「弁当箱」が展示されています。被爆した動員学徒の遺品や被爆して11時2分を指したままの時計やロザリオが出品されています。動員学徒の鞆は広島平和記念資料館、腕時計とロザリオは長崎原爆資料館、動員学徒の弁当箱は当館所蔵の資料です。

戦後72年以上が経ち、被爆者が次世代に直接被爆の実相を伝えることが難しくなり、被爆資料を残すことの重要性は増しています。しかし、まさに原爆の惨状の中に投げられ爆風や熱線や放射線を浴び、持ち主の遺品となってしまったような資料の多くは、極めてもろい状態です。こうした資料を活用しつつ残すには、専門的な技術による運搬や展示方法の細かい調整や管理が不可欠であり、今回も、長崎原爆資料館と広島平和記念資料館の担当者が京都まで資料を運搬することとなりました。

今回、展示されることとなった弁当箱は、今から72年前、広島県立広島工業学校1年生だった生田裕壮（いくたゆうそう）さんが使用していたものです。

1945年、広島市内では多数の学校の中学1年生や2年生が空襲による建物の類焼を防ぐために建物を撤去する建物疎開の作業に動員されていました。広島県立広島工業学校の1年生も8月1日から10日間の予定で動員されており、8月6日、裕壮さんは同級生たちと共に朝から中島新町（爆心地から約700m）で作業をしていたところ、原爆が投下されました。この場所にいた190名近くの1年生生徒と引率教員は亡くなりました。被害の状況は悲惨で、無数の遺体から個人を判別すること



展示中の弁当箱（11.3cm × 18cm × 5.5cm）

が難しいため遺骨を手にする事ができない遺族も多数いました。

裕壮さんの父のハジメさんと母のハツエさんも、裕壮さんが戻らないため探しにでかけましたが、裕壮さんを見つけることができませんでした。惨状であった建物疎開の作業場所で唯一見つけることができたのが、裕壮さんの持ち物だったこの弁当箱です。弁当箱は焼け、中身は焦げていてそのままの状態ではありませんでしたが、ハツエさんがその日の朝、裕壮さんのためにつめたおかずが入っていたため、これが裕壮さんのものだとわかったということです。

ご遺族である裕壮さんの弟さんは、母のハツエさんが生前のように語っていた旨を現在も記憶されています。ハツエさんは弁当箱の焼け焦げた中身を取り除いてきれいにして、大切に残していた模様で、現在の状態で寄贈されました。弁当箱の蓋部分には焼けたような跡も残り、箱部分は底面に大きなくぼみがあり、縁が大きくゆがんでいます。

（学芸員 兼清順子）

写真協力：Yahoo! ニュース 個人 鏡 麻樹（Asaki Abumi）

# 「ノーベル平和センター」との協力を可能にしたもの

安齋育郎

(国際平和ミュージアム名誉館長)

ノーベル平和賞がICAN（核兵器禁止国際キャンペーン）に授与されることが発表された昨年10月6日直後、「平和のための博物館国際ネットワーク」(INMP)理事のリヴ・アストリド・スヴェルドルプさん（ノーベル平和センター展示部長）から、ICAN受賞に関する展示に協力して欲しい旨の要請がありました。

展示会はノーベル平和賞受賞式の翌日から始まるので、時間的余裕がありません。要請を受けて、当ミュージアム前副館長の山根和代さんと私はいくつものアイデアを提案しましたが、私からは当ミュージアムが収蔵する被爆関係資料を紹介するとともに、10月19・20日に広島平和記念資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念資料館、長崎原爆資料館を訪れ、資料貸し出しへの協力を要請しました。実は、博物館の収蔵物の貸し借りは手続きも輸送費用もとても大変です。リヴさんは国際平和ミュージアムの被爆学生服に「ぞっこん惚れ込み」しましたが、高額な輸送費を考えると困難です。「日本からの被爆資料借り出しは諦めよう」と心が揺らぎましたが、私から「被爆資料はとても大切かつ有効だからぜひ来日しよう」強く働きかけました。

11月15日、ついにリヴさんが来日、傷みやすい被爆学生服は諦めたものの、被爆資料5点（立命館の「弁当箱」、広島の「防空頭巾」と「かばん」、長崎の「ロザリオ」と「腕時計」）を借り出すことが出来ました。リヴさんは大変喜んで、自ら空路でノルウェーに持ち帰りました。山根さんはリヴさんの関空到着から離日までの4日間、リヴさんに「徹底的に」アテンドしました。

今回の協力関係はINMPを通じて可能となったもので、国境をこえた平和博物館のネットワークの有用性が改めて確認されました。INMP理事のクライヴ・バレットさん（イギリス）からも、「INMPがこのような機能しているのは嬉しいことだ」というメールが来ました。

当ミュージアムからは被爆弁当箱を貸し出しましたが、ノルウェーの子どもたちも弁当箱（ランチ・ボックス）にサンドイッチなどを入れて学校に行くので、「被爆弁当箱」は若い来館者の感性に訴えかけ、ICAN受賞の背景にある核兵器の非人道性を考えるための「小さいが大切な」展示物になると期待しています。



2005年に設立されたノーベル平和センター。横断幕には展示タイトル「BAM THE BOMB」の文字（オスロ/ノルウェー）



広島平和記念資料館にて、立命館・広島・長崎関係者とリヴさん（2017年11月17日）



貸し出し資料を前に博物館関係者と確認作業をするリヴさん（2017年11月18日、ミュージアムにて）

# 巻頭 つれづれ

## 「時分の花」と「時の驕り」 —平和の意味と平和博物館の意義

安齋育郎

(国際平和ミュージアム名誉館長)

### まんが『コボちゃん』に学ぶ

植田まさしさんの漫画『コボちゃん』に、面白い作品がありました。

コボちゃんが英語をちょっと習っているヒロコちゃんとニワトリ小屋の前で話しています。

ヒロコちゃん「にわとりはチキンっていうのよ」

コボちゃん「知ってる」

ヒロコちゃん「オスのにわとりはコックっていうのよ」

コボちゃん「それは知らない」

ヒロコちゃん「メスはヘンっていうのよ」

コボちゃん「フーン」

さて、問題はこの次です。起承転結の「結」にあたる第4コマ目の展開です。

コボちゃん「すると、にわとりは夫婦別姓か…」

“えっ、そう来るか” という感じですね。見方を変えるとガラッと違った世界に通じます。

大分前のことですが、姜尚中さんが司会するNHKテレビの「日曜美術館」に招かれました。画家の木津文哉さん、美容家のIKKOさんとご一緒しましたが、テーマは「だまし絵」。一連の作品の中に、見る角度によってまったく違ったものに見える作品がありましたが、コボちゃんはそれを想起させてくれました。

ある弁護士さんからの年賀状に、「平和とは？先生の持論を忘れません」と書いてありました。10年ほど前、私が講演の中で、「現代平和学では、平和を『戦争のない状態』ではなく『暴力のない状態』としてとらえる理解が広まりつつあり、暴力とは『自己実現を阻害する原因』を意味します。したがって、戦争のような『直接的暴力』だけでなく、飢餓・貧困・社会的差別・人権抑圧・環境破壊・教育や医療の遅れな

ど、社会のありように起因する『構造的暴力』や、それらの暴力を助長したり正当化したりする『文化的暴力』も含まれます」と話したことを、記憶に留めておられるようです。何らかの原因で、人間が能力を全面開花させることが出来ないとすれば、たとえそれが「戦争」ではなくても「平和」とは言えない—私はそう考えています。知人の弁護士は、私の講演を契機に「平和の概念」を「戦争の対置概念」から「暴力の対置概念」として捉え直した結果、自身の持ち分である人権分野の状況理解に、前とは違った景色が見えてきたのかもしれませんが。既存概念に囚われがちな私たちにとって、「問い直し、捉え直し」はとても大切だと思います。

### 世阿弥の「時分の花」のこと

私の寝ぎわの愛読書『寄席芸人伝』（古谷三敏ファミリー企画）の第62話に、「老木の花林家金蔵」という話があります。四十年配の真打・古今亭三菊が、高座で「宮戸川」という落語を演じています。ひょんないきさつからそれぞれ家を締め出された若い半七とお花が夜中にばったり出会い、緊急避難的に半七の叔父の家で一夜を過ごすことになりましたが、一つ布団でまんじりともせず背中合わせで過ごす夜半、空模様が怪しくなって雷ゴロゴロ。やがて雷光一闪、カリカリカリッと鳴り響いたと思うとガラガラドシャ〜ンと落雷。お花は思わず半七に…という展開ですが、この色香漂う初心な若い男女の情景を可笑しみと温かみを滲ませながら演じる落語です。

しかし、四十年配の三菊が演じる「宮戸川」は何か清潔感が損なわれ、ある種の淫猥な感じが漂います。演じ終わった三菊に、年配の林家金蔵が「お前さんの年齢で演る落語じゃねえ」と諭し、二つ目になったばかりの若手の弟子・林家小松と勝負するよう提案します。三菊は、嫌みのない色気を漂わせた若々しい小松の好演に自らの非を悟りますが、師匠の金蔵は、「お前さんの芸が小松より劣っているわけじゃない。『時分の花』てえやつだ」と話しかけます。

「時分の花」は室町時代初期の猿楽師・世阿弥の『風姿花伝』に出てくる言葉で、いわば、「若さによって生まれる一時的な芸の魅力」。英語で言えば“flower at season”というところでしょうか。変声期も過ぎ、体もそれなりに一人前になり、

若々しく、新鮮で、能楽者として人々にもてはやされる「旬の花」という感じですが、世阿弥は、この時期の「若さが醸し出す魅力」を本当の実力だと思い込んで慢心することを「あさましきこと」として切り捨てています。そして、この「時分の花」が咲く青年期に初心を忘れずに稽古に励んでこそ、壮年期に咲く「まことの花」を育ていけるとしています。

金蔵師匠は三菊に、「芸人には一時的だが若さが咲かす花がある。『宮戸川』なんていう男女の落語なんぞがピタリと嵌る。残念ながらあたしもお前さんももうその花はとっくに散っちゃまった」と説き、「お前さんは本当の花が咲く年齢だ。世阿弥は言ってるよ。壮年期は“盛りの極めなり”てな」と語りかけて、三菊に年齢相応の落語を演じることを勧めます。

私は、この話を読んで『風姿花伝』に改めて目を向けました。そして、世阿弥が、「上手くなるのは34～35歳までで、40を過ぎれば落ちていくだけだ。だから、壮年前期（30代半ば）は人生を振り返り、自分の生き方を見極める時期だ」と言っていることに、ちょっとした衝撃を受けました。その年齢の頃、私は東京大学医学部助手でしたが、国の原発政策批判に熱心に取り組んでいたため、研究室では村八分・ネグレクト・差別・監視・恫喝・懐柔など様々なハラスメントを体験していました。いわば「自己実現の道」を閉ざされていた感じでした。いや、あれが若さゆえの一途な情熱の発露であり、自分にとっての「時分の花」だったのかもしれないと思いつつ、平和の現代的概念規定からすれば、私の人生で最も非平和的な時期だったなあとも感じています。

## 山口誓子の「時の驕り」のこと

私は、日常の手紙は「和紙に筆書き」かつ「簡単な絵を添える」ことにしています。毎年何百通もの絵手紙を書くのが常ですが、そんなこともあって、先日、俳人・山口誓子（1901～1994）の句に直原玉青（1904～2005）が俳画をつけた『続俳画入門』（保育社）に目を通していました。

すると、「碧揚羽通るを時の驕りとす」という句に出会いました。



横向きの揚羽蝶の家紋

誓子によれば、この句が作られた事情は以下のごとくです。

「つつじの花が剪って置いてある。花があれば鳥や虫を連想する。私は揚羽蝶が好きだから、揚羽蝶を登場させる。私の母方の家は能登に流された大納言平時忠の裔であるから、揚羽蝶を太い輪でかこった紋を家の紋としている。あの横向きの揚羽蝶はいい恰好をしている。いま私の目の前を通り過ぎた揚羽蝶はぎらぎらの碧い羽根で飛んでいる。その横向きの碧い揚羽蝶を見たのだ。それを見た時点は、私にとっては贅沢極まる時点と思われた。驕りの時点と思われた。（この「驕り」という言葉は、口を衝いて出た。「驕る平氏は久しからず」の「驕り」ではない）。

玉青の絵が先にあって、それに触発されて誓子が句をつけたようにも感じますが、私は、誓子が連想の世界に没入して、登場させた碧い揚羽蝶がつつじの花を過っていく瞬間を「時の驕り」ととらえた感性と表現力を羨ましく思いました。

修学旅行などで訪れる子どもたちにとって、平和ミュージアムは自ら進んで選び取った訪問先ではないかもしれませんが。しかし、若い子どもたちにとって、ミュージアム訪問が後々「大切な時間だった」と感じられることを心から期したいと思いません。それだけに、平和学習の場として平和博物館を選び取ってくれる教員の皆さんにとっても、このミュージアムを選んだことが「子どもたちの人生にとって貴重な時間を提供した」と感じられるように、いっそう工夫したいものです。

小中学生は、専門が決まっている訳でもないし、自分でカリキュラムを創造したり選んだりするチャンスがある訳でもありません。教科書の内容や、教員の問題提起や説明、他の生徒たちとの対話、社会教育で訪れる施設での体験などを通じて、思いもよらなかったことにも接しながら、知識や考え方を広げ深めつつ成長の過程をたどります。平和博物館への訪問が「時の驕り」、「来て得をした！」と感じられるためには、ミュージアム側の努力だけでなく、「何をもって『時の驕り』と考えるか」という社会の評価軸が関わっていることは言うまでもありません。

私は1940年に東京で生まれましたが、1944年に空襲をのがれて福島県二本松に疎開し、5年間をそこで過ごしました。食料や遊び道具や学習資材どれをとっても大変粗末な時代でしたが、野イチゴやグミや桑の実など季節の恵みを味わい、野の花や虫を観察し、イナゴやドジョウ捕りに夢中になったあの時代は、私の人生の中で最も豊かに自然と交わった日々でもありました。私のその後の発達にとっての「時の驕り」と言えなくもありませんが、戦後の貧困と窮乏の時代を「時の驕り」と呼ぶのは、ちょっと不本意な気がします。

## 公開シンポジウム 「沖縄戦の後を生きる」

加國尚志

(平和教育研究センター副センター長 / 文学部教授)

立命館大学国際平和ミュージアムでは、開館 25 周年記念 2017 年度秋季特別展「儀間比呂志版画展－沖縄への思い－」関連企画として、立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センターと同志社大学〈奄美・沖縄・琉球〉研究センターとの共催で、公開シンポジウム「沖縄戦の後を生きる」を 2017 年 12 月 2 日午後 1 時より立命館大学衣笠キャンパス平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルームで開催しました。

この企画は、秋季特別展「儀間比呂志版画展」の内容を踏まえ、儀間比呂志の作品に沖縄戦の悲惨な経験のみではなく、戦後の沖縄のさまざまな矛盾に苦悩する沖縄の人々の姿を描いた作品が見られることから、沖縄の戦後の歴史と経験について学ぶことを通じて、儀間作品のもつ政治性と歴史性をより明らかにすることを旨とするものでした。

沖縄と戦争をテーマにした語りのなかでは、本土で唯一上陸戦が行われた沖縄戦の悲惨さが語られることは多いのですが、戦後米国領となり、1972 年の本土返還後も米軍基地の集中する場所として、いわば米国による戦争の最前線に置かれてきた沖縄の人々の苦しみや怒りについて語られることは少なくなっています。しかし、戦後の沖縄における米軍基地の存在、繰り返される米兵による事件や米軍による事故被害、基地反対運動闘争などを知れば、私たちは戦後日本の「平和」や「民主主義」というスローガンや復興と経済的繁栄の物語そのものにひそむ



謝花直美氏



富山一郎氏

欺瞞に気づかざるをえません。戦後の沖縄という視点から見れば、日本は実際には戦争を継続し、真に平和を望む人々を抑圧しつづけてきたのではないかと。そしてその観点からすれば、戦前の国家による戦争体制は、戦後も米国の国防戦略に従属した安保体制の維持という形で継続されてきたのではないかと。そうした厳しい視点から戦後日本の自画像と戦争についての語りを見つめ直す機会としたいと私たちは考えたのです。

パネリストとして富山一郎氏（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授、〈奄美・沖縄・琉球〉研究センター センター長）、謝花直美氏（沖縄タイムス編集委員）、森亜紀子氏（同志社大学 日本学術振興会特別研究員）にご登壇いただきました。司会は番匠健一氏（立命館大学国際平和ミュージアム平和教育センター リサーチャー）にご担当いただきました。

まず謝花氏は儀間比呂志の作品「海」を切り口として、その風景としての沖縄市垣花の歴史について語ることから始められました。沖縄戦中から米軍が港を浚渫し始めた垣花は戦後に那覇軍港の一部となっていきます。儀間作品に込められた歴史性を皮切りに、自身の家族の戦争経験、嘉手納基地での B52 墜落炎上（1986 年）、那覇基地のナイキミサイル誤発射（1959 年）など、つねに死と隣り合わせに生きなくてはならない沖縄県民の経験について語られました。

つづいて、森氏は「〈証言〉を聞き、記録・表現すること」と題して、自身の研究との関連から「証言」の問題についての考察を展開されました。自身は大阪にいて沖縄戦を経験しなかった儀間比呂志が戦争を描くということについて、「自分ではない〈誰か〉になる」過程だったのではないかと問題提示をされ、〈体験者〉に自らを固着させる儀間の表現について語られました。また、儀間のテニアン島体験について触れられ、そこにもただ自身の体験を描くだけでなく、複数の人物の声の反響を聞き取る姿勢を見出し、それを自身の研究とも重

ね合わせながら、「複数の他者を自分の中に抱え込む」という過程の意義を語られました。それは過去を抱えて生きること、死者を蘇らせる語りとして、歴史を実践すること (doing history) としての歴史学を開くことになるのではないかと語られました。

富山氏は、菅官房長官の談話に見られる、豊かで平和で自由な国としての日本という歴史認識への批判を皮切りに、沖縄戦を日本軍による沖縄県民の虐殺としてとらえる視点を、森崎和江の言葉とともに紹介されました。沖縄戦当時、沖縄語を話す者は「間諜」と見なして処分する、とした軍令に見られるように、日本軍の暴力は容赦なく沖縄の人々を襲ったのです。そして沖縄戦から今日まで、無法な「戒厳状態」がつづいていることを指摘しながら、軍による生活の中の暴力に怯えて暮らさざるをえない、沖縄の人々の「視線」を指摘されました。儀間比呂志の詩画集『日本が見える』の「見える」という言葉にあるように、この視線の前では、日本が見られているのであり、この視線を受け取ることの重要性を主張されました。

それぞれのお話のあと、番匠氏の司会により質疑応答が行われ、会場を埋めていた聴衆からは多くの質問が寄せられ、沖縄の戦後と日本の現在についてパネリストたちと充実した討論が繰り広げられ、公開シンポジウムは終了しました。国際平和ミュージアム平和教育研究センターでは今後も他の研究機関と連携を深め、戦争の歴史と平和へ向かう思考について、多くの研究実践を行っていく予定です。



森亜紀子氏



#### 次回予告

立命館大学国際平和ミュージアム平和教育研究センター主催

映画上映会&トークイベント「憲法9条を武器として一恵庭事件 知られざる50年目の真実」

日時：2018年5月2日（水）

上映会 ※2回上映 ①14:30~ ②18:00~ (108分)

トークイベント 16:30~17:50

会場：衣笠キャンパス内 ※後日HPにて告知

登壇：稲塚秀孝監督（株式会社タキオンジャパン代表取締役） 内藤 功氏（弁護士、日本平和委員会代表理事）

司会：君島東彦氏（本学国際関係学部教授）

後援：京都平和委員会

## 研究プロジェクト 「平和博物館における戦争体験 継承のための展示モデル構築」

兼清順子

(平和教育研究センター運営委員/学芸員)

平和博物館はこれまで、戦争中に起きた出来事を通して、戦争の悲惨さや平和の大切さを伝える役割を果たしてきました。しかし、戦後70年以上が経ち、体験を伝えてくれる人が減り、当時の状況を理解するために必要となる受け手の側の知識も薄くなり、今後の展示のありかたが問われています。平和教育研究センターの「平和博物館における戦争体験継承のための展示モデル構築」(科研費挑戦的萌芽研究)プロジェクトでは、本年度は1月までにワークショップの開催、博物館海外調査、体験者への聞き調査を行い、博物館において戦争に関わる体験を伝える上での課題について研究を行っています。ここでは、第3回と第5回のワークショップについて簡単に報告します。

第3回ワークショップ「原爆体験の伝承」(5月13日開催)では、「くにたち伝承者育成プロジェクト」の伝承者である藤本容子氏の実践と、同プロジェクトのアドバイザー根本雅也氏による発表、その中で根本氏が伝承者やプロジェクト推進者に問いかけた課題を中心に議論が行われました。一つ目は体験証言のコピーでもなく、映像でもなく、「生の声」で伝えることの意味。二つ目は、展示ガイドと伝承者の違いです。この課題は展示制作の上でも問われるべきものであることが指摘されました。また、議論の中では、体験者→伝承者→聴衆の図式の中で、伝承者が体験者からどう「聴く」かも伝承を大きく左右し、根本氏の課題とともに、自らが誰に向けて語るために聞くのか、体験者との向き合い方の変化が聴き方の変化に繋がるなどの点も指摘されました。手探りで原爆体験者の桂氏と向き合ってきた藤本氏の経験談もこれに重なるものでした。

第5回ワークショップ「戦争の記憶を紡ぐー写真メディアの可能性」(11月15日開催)では、ISに迫害されたヤズディの人々取材した写真集『ヤズディの祈り』などの著作のあるフォトジャーナリストの林典子氏に、作品と取材過程での経験、特に戦争の記憶を伝えることにどう向き合われているかお話をいただきました。

取材を通してヤズディと生活を共にするなかで、襲撃以前の生活の様子を聞き、当時の写真を見せてもらううちに、彼らの過去を知りたいと思うようになり一人で廃墟を訪れて撮影をしたエピソードなど、長期にわたる取材の中でヤズディの生活も林氏の思いも変化し、その変化の中でヤズディの記憶の残し方を模索した経験、その中で出てきた具体的な撮影方法について語られました。林氏の撮影方法は、記憶が語り手と聞き手の間で成立することを強く意識したものであり、討論の中では文化人類学のフィールドワークとの通底、フォトジャーナリズムとアートの境界、メディアとしての撮手、写真と言葉の違い、個人の記憶とエスノグラフィの関係など、写真が戦争の記憶を紡ぐ媒体となる上での論点が出されました。

2018年度もワークショップ、博物館調査、聞き調査を進め、これらによる特別展を開催する予定です。

\*この研究はJSPS 科研費 16K12814の助成を受けたものです。

### 第3回ワークショップ

(2017年5月13日(土) 17:30~20:30)

「原爆体験の伝承」

藤本容子(くにたち伝承者育成プロジェクト)

根本雅也(くにたち伝承者育成プロジェクトアドバイザー・衣笠総合研究機構プロジェクト研究員)

[http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/news/17/170604/news\\_170604.html](http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/news/17/170604/news_170604.html)

### 第4回ワークショップ

(2017年8月8日(火) 14:30~17:00)

「Remembering the Saved City: Kyoto, the Atomic Bomb, and the Nuclear Taboo」

アレックス・ワラストライン(スティーブンス工科大学准教授)

[http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/news/17/news\\_170813\\_2.html](http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/news/17/news_170813_2.html)

### 第5回ワークショップ

(2017年11月15日(水) 17:00~20:00)

「戦争の記憶を紡ぐー写真メディアの可能性」

林典子(フォトジャーナリスト)

[http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/news/17/news\\_171129.html](http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum/news/17/news_171129.html)

### 第1回聞き調査(2017年9月27日(水))

1945年に16歳で満州報国農場の実習生となり、ソ連の侵攻による逃避行や避難民としての引き揚げの体験を持つ村尾孝氏に京都市北区のご自宅にて聞き取りを行った。

### 第2回聞き調査(2017年10月28日(土))

建物疎開により住居を失った経験、戦時中の勤労働員、終戦をはさんだ新婚時代の生活の様子など三田村のい子氏に戦中や戦後の経験を京都市中京区のご自宅でご伺った。

### 第3回聞き調査(2017年11月25日(土))

豊川海軍工廠での潜望鏡のレンズ製作などの学徒勤労働員の後に召集され、中国大陸で終戦を迎えた林隆一氏に聞き取りを行った。京都市伏見区の林氏のご自宅にて。

### 第2回博物館海外調査(2017年4月6日(木)~13日(木))

帝国戦争博物館、ロンドンユダヤ博物館、ロンドン市立博物館、ブラッドフォード平和博物館、北アイルランド戦争博物館、アルスター大学 Everyday Objects Transformed by the Conflict 展示。

### 第3回博物館海外調査(2018年1月4日(木)~14日(日))

戦艦アリゾナ記念館、戦艦ユタ記念碑、戦艦ミズーリ、パールハーバー太平洋航空博物館、潜水艦ボーフィン、ハワイ・アメリカ陸軍博物館、国立アメリカ歴史博物館、全米ホロコースト博物館、ベトナム戦争記念碑。



くにたち伝承者育成プロジェクト藤本容子氏によるワークショップ



## 平和のための博物館 市民ネットワーク特別講演会

兼清 順子

(平和教育研究センター運営委員 / 学芸員)

2017年12月9日(土)から10日(日)に、第16回平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会が開催されました。毎年一回、全国から平和博物館の活動に携わる会員が集い、講演会や活動報告を行い、議論、交流を深めています。戦後70年以上が経ち、戦争の記憶の風化や世界や日本を取り巻く状況に対する不安の声が高まる中での開催ですが、丁寧に伝えることでの手応えや、東京・板橋で新しい博物館を作る動きについての報告もあり、平和のための博物館の広がりを感じさせるものとなりました。

平和教育研究センター主催の特別講演会では、講師として追手門学院大学教授の井出明氏をむかえ、「ダークツーリズムとミュージアムー戦争と平和を考えるー」と題した講演をいただきました。

これまで、観光や団体旅行の目的地として、災害や虐殺のあった場所、戦争遺跡などに多くの人々が訪れていました。しかし近年、特に東日本大震災の後、「ダークツーリズム」としてこうした記憶の場を訪れる人々が増え、ダークツーリズム研究への関心も高まっています。平和博物館の中でも、特に、負の記憶の場と直結するような館は、ダークツーリズムの対象地と見られることに関心や疑問を抱いています。2016年、2017年の日本平和博物館会議でもこの件が協議されました。こうした状況を踏まえて、多数の平和博物館関係者が集まる場に日本におけるダークツーリズム研究を牽引してきた井出氏をお招きし、ダークツーリズムとその研究動向、ダークツーリズム研究



井出 明氏

の側から見える平和博物館の課題について講演をいただきました。

1990年代から盛んになったダークツーリズム研究では、人類の悲しみの記憶の場を訪れる観光に対して、訪問者の体験、施設運営側の趣旨、ダークネスについて、など多様な側面からダークツーリズムについて明らかにしてきました。ダークツーリズムとは、近代が抱える問題に影から接近する方法論であり、自然災害など同時代の悲しみ(東日本大震災など)を通して悲しみを共有し、それを入り口にして、遠い死にも近づく手法を持つものです。

多くの平和博物館は、この範疇に入りますが、ダークツーリズムは、戦争と平和以外にもさまざまな負の記憶の場を対象にしており、講演ではこうした広い観点から平和博物館を検討した際に浮かび上がる課題も指摘されました。

特に本質に関わる課題は、近代の問題です。ダークツーリズムとして負の記憶を扱う博物館全体を俯瞰してみると平和博物館は、個別の出来事や体験を伝えることが中心となり、ほかの施設に比べて近代の問題として提示する姿勢が弱いようです。平和博物館のこれまでの活動は、総力戦という近代特有の問題の中で起こった出来事を、展示したり語るということで問う活動ではありますが、近代の問題として来館者にうまく伝えきれていない傾向があることが指摘されました。そしてこうした点が効果的に提示されている分野として、環境問題を取り扱う施設が紹介され、他の地域や事例とつなぎ、出来事の発生構造を理解させたり、他の文脈や問題と結びつけた検討を促す姿勢が紹介されました。

また、具体的な実践提言として、展示ガイドがプロの案内役に徹することの重要性、効果的な情報発信活動によってヘイトスピーチなどに備えることの必要性、観光を入り口と考える視点の効用などの提起もありました。

その後、学芸員の兼清より、平和博物館のこれまでの歩み、特に出来事の起きた場でそれを語り伝える努力もまた、その場所の持つ記憶として扱う可能性についてのコメント、会場から修学旅行などの平和学習目的の観光とダークツーリズムの違いなどについての質問があり、平和博物館が、展示交流などで他の分野の博物館とつながることで開かれる可能性、ダークツーリズムは、隠されていた部分から近代の問題に接近する方法であり、ダークツーリズムの観点から見れば、平和は目的ではなく、出口の一つであるとの論点が追加されました。

ダークツーリズムの場は負の出来事のあった場ですが、そこで当事者が語り続けてきたことも、こうした場の持つ記憶です。今後こうした点もダークツーリズムの観光者に問いかけることもまた、平和博物館の課題になることでしょう。

## 柿色の筆箱 — 植民地経験の複層性への視点

澤野美智子

(国際平和ミュージアム運営委員 / 総合心理学部准教授)

### フィールドでの経験

学生時代、筆者が韓国農村で1年間のフィールドワークをしてきたときのこと。村の敬老堂（高齢者用の公民館）では、日本人である筆者を目の前にした村人たちが、日本の植民地期を回想する語りを繰り返すことがありました。反日感情を口にする人も皆無ではありませんでしたが、多くの人たちは筆者に対して温かく、特に高齢女性たちは（筆者を気遣ったことだったのかもしれませんが）懐かしそうに植民地期のことを語ってくれました。

例えばある女性は、幼少期は地方都市に住んでいたといいます。学校の横に運動場があったので、剣道をする様子などをよく見物したそうです。小学校（当時の名称は普通学校）に入学する前、父親に連れられて日本人の経営する文房具店へ行き、筆箱、鉛筆、コンパスなどの学用品を購入しました。父親が筆箱を選ばせてくれたとき、赤や緑の筆箱はありふれていたのに「カキイロ（柿色）」を選びました。すると日本人店主が「この子は明るい性格ですね」と言い、父親と顔を見合わせて笑ったそうです。このことを女性は、幼少期の大切な思い出として慈しむように語ります。

筆者にとってこの話が意外に思えたのは、戦争時代、植民地時代と聞くと、武力攻撃、暴力、飢餓というおどろおどろしいもので日常が彩られているイメージを持っていたためです。特に、植民地の人たちと宗主国の人たちは互いに反目しあい、宗主国から植民地への搾取と、それに対する植民地の人々の抵抗ばかりが繰り返されるイメージを持っていました。ところが韓国農村の高齢女性の語りから浮かび上がるのは、文房具店でわくわくしながら柿色の筆箱を選ぶ小さな女の子、そしてその様子を愛おしそうに見守る父親と日本人店主の姿でした。

当時のこの地域の進学率から考えて、女兒に学校教育を受けさせたところを見ると、この女性はある程度裕福な家庭に生まれ育ったと考えられます。女性の父親はどのような仕事をしていたので



筆者が学生時代にフィールドワークを行なった韓国農村（2008年、筆者撮影）

しょうか。その話は聞いていませんが、ビジネスもしくは政治上で成功した人物だったのかもしれませんが。そして、文房具店の日本人店主は、どのような経緯で朝鮮半島の小さな地方都市に店を構えるに至ったのでしょうか。本人を探し出すことなど不可能に近いので推測するしかありませんが、新天地でのビジネスチャンスを夢見て、あるいは日本での生活に何らかの困難を感じて、朝鮮半島に渡ったのでしょうか。先に生活基盤を作った同郷人や親戚を頼ってこの地方都市に来たとすれば、どのようなネットワークが形成されていたのでしょうか。そして、彼は朝鮮半島の人々や文化をどのように見つめ、どのように接触しながら暮らしていたのでしょうか。また逆に、朝鮮半島の人々は、同じ町に住む日本人をどのように見つめ、どのような関係を築いていたのでしょうか。

筆者は柿色の筆箱の事例を用いて「この時代は平和であった」などと言うつもりはありません。この時代に世界各地で展開された帝国主義と植民地政策という制度そのものが支配と搾取を目的として展開されたこと、宗主国と植民地の間に暴力的行為や不均衡な格差が存在したことは、まぎれもない事実です。文房具店を訪れた小さな女の子と父親も、日本人店主も、そのような時代の渦中にいました。ただしそこで彼らが織り成していた小さな日常の一コマは、加害者／被害者、支配者／被支配者という二項対立的な枠組みでは捉えきれないものでした。彼らはそれぞれの置かれた立ち位置から、時代を生き抜く方法を試行錯誤し、異文化と接触する方法を模索する中、早春の店先で顔を合わせたのです。

### 植民地の複層性

人類学や歴史学においては、植民地を人や文化の出会いの場と

して捉える視点からの研究がなされています<sup>※1</sup>。植民地が支配と搾取のためのシステムであったことには違いありませんが、ミクロレベル（個人レベル）で見ると、植民地は、人びとの様々な体験や感情が交錯し、異文化同士が出会い、体制内での生き方を模索する場でもありました。歴史教科書を読むだけではなかなかイメージしにくいですが、植民地・宗主国のいずれもが一枚岩ではなく、多様な人々を内包していました。教科書や博物館展示でクローズアップされがちなのは、宗主国の為政者や上級兵士、植民地の犠牲者や抵抗者です。たしかに彼らは歴史上重要な人びとです。しかし同時に、宗主国には様々な階層の人びとがおり、多様な目的をもって植民地に渡ってゆきました。また植民地にも、暴力や搾取の犠牲となる人びとだけでなく、高等教育を受けて宗主国の行政に協力する、いわゆる「協力エリート」として生きた人びともいました。植民地の中心部には宗主国の食べ物やモノを売る店が作られ、植民地の富裕層がそれらに親しむ光景も見られました。植民地の観光地や名物は宗主国の絵葉書やガイドブックで紹介され、宗主国の富裕層をいざないました。あるいは、植民地で生活に行き詰まった人々が宗主国へ、宗主国で生活に行き詰まった人々が植民地へ、生きる術を求めて出稼ぎに行ったりもしました。出稼ぎ先では地縁や血縁を基盤とするネットワークが作られ、集住地域が形成され、そこで独自の文化が生みだされました。宗主国および植民地で、文化と人の様々な出会いが起こり、時には親密な関係が築かれ、時には差別や排除が起こりました。すなわち、植民地経験とは非常に複層的なものでした。

一方、現代の教科書や博物館展示を見ると、加害者／被害者、支配者／被支配者というシンプルな二項対立の枠組みで当時の様子が説明される傾向があります。毎年夏にメディアが報道する平



フィールド先の農村で敬老堂に集まる高齢女性（2008年、筆者撮影）

和関連の記事もこのような二項対立に依拠しています。個人の具体的な語りを取材して書かれる記事も、「被害者に被害の語りを聴く」「加害者に加害の語りを聴く」というように、二項対立を前提として組み立てられています。この方法が、戦争や帝国主義、植民地支配の暴力性を分かりやすく伝えるために効率的な方法であり、ひとつの重要な役割を担っていることは事実でしょう。また、植民地というシステムや戦争のことをよく知らない人びとに対して、まずはシンプルな知識から伝えることも必要です。しかし複層性を削ぎ落としたシンプルな二項対立からは、「戦争はいけいない」というメッセージを伝えることはできても、未来の平和に向けて私たちが何をすればよいかという具体的な発想を生みだしにくい面もあります。韓国農村で柿色の筆箱の話聞いて驚いた筆者のように、植民地経験が血塗られた側面だけではない複層的なものであったことを知らない人は非常に多いでしょう。

## 平和を「する」ために

平和研究と呼ばれる分野では、戦争や暴力に関心を向けて「どうなつてはいけないか」を伝えてきましたが、「どうなればよいか」「どうすればよいか」つまり平和を「する」ことにあまり目を向けず、こなかったことが指摘されています<sup>※2</sup>。戦争や植民地支配の中で起こされた暴力や搾取、差別についてきちんと知り、「こうなつてはいけない」と学ぶことは非常に大切です。しかしこの段階にとどまらず、その激動の時代に様々な人びとや文化が入り混じるなか、どのように日常生活を積み重ねていたのか一例えば1940年代の朝鮮半島の文房具店で顔を見合わせて微笑んだ父親と日本人店主それぞれの生活背景と、彼らが織り成していた日常一を知ること、平和とはどうなることであるか、どうすれば平和になるかを考えるヒントを得られるでしょう。

分かりやすいシンプルな二項対立を越え、加害者／被害者、支配者／被支配者という枠組みにはおさまりにくい複層的な個々の経験に、丹念に目を向けること。平和を「する」とは、ここから始まるのではないのでしょうか。

## 参考文献

- ※1) 栗本英世・井野瀬久美恵（編）、1999、『植民地経験—人類学と歴史学からのアプローチ』人文書院。
- ※2) 小田博志・関雄二（編）、2014、『平和の人類学』法律文化社。

## 第24回日本平和博物館 会議報告

兼清順子

(平和教育研究センター運営委員 / 学芸員)

第24回日本平和博物館会議が、沖縄県平和祈念資料館で開催されました(2017年12月7日~8日)。毎年秋に加盟館10館からの参加者が集まり、協議や協力体制に向けた情報交換、交流、フィールドワークなどが行われています。

現在、平和博物館全体を覆う課題は、体験の無い人が他者の戦争体験を語るかということです。戦争体験者が減少する中、数年前から、体験の無い世代が体験者の体験を語る活動を行う館が増え、毎年、このテーマに関わる意見交換をしています。今年は、ひめゆり平和祈念資料館、広島平和記念資料館、長崎原爆資料館などで取り組みが進んでいる様子が紹介され、博物館の中での実践として、非体験者が戦争体験を語る時期に入ったことが感じられました。

昨年は、「ダークツーリズム」に平和博物館はどう向き合うべきか、その概念の紹介とともに議論されました。そして今年は、「ダーク」ではなく、「ピースツーリズム」の可能性や取り組みの状況について協議され、平和博物館の側がダークツーリズムをピースツーリズムの可能性として捉え返す姿勢も浮かび上がりました。

また、2017年のノーベル平和賞をICANが受賞し、当館、長崎原爆資料館、広島平和記念資料館から、被爆資料が海を渡りオスロへ貸し出され、現在ノーベル平和センターで展示されていることも紹介されました。

その後、沖縄県平和祈念資料館の学芸員平田守氏の案内で、平和記念公園でのフィールドワークを行いました。就労や



フィールドワーク1：健児の塔の裏手にある豪を見下ろす参加者。この豪で鉄血勤皇隊として沖縄戦に動員された沖縄師範学校の生徒が亡くなった。



フィールドワーク2：沖縄県平和祈念資料館学芸員平田守氏の案内で平和の礎を見学する参加者。

徴用や強制連行などで沖縄に在り命を落とした韓国人の慰霊塔、日本軍として沖縄戦に配属された各県出身者の遺族会などが立てた慰霊碑、18万以上の遺骨が安置されている国立沖縄戦没者墓苑、日本軍の司令官を祭る黎明の塔、沖縄戦で命を落とした全ての人の名前を刻む(県外で戦争で亡くなった県民も含む)平和の礎、学徒の遺骨が今も近くに眠る健児の塔などを回りました。短時間で多くの碑を回りながら、沖縄戦の中で起こったこと、戦後の死者の扱いをも含めた格差や課題まで浮かび上がるような案内をいただきました。黎明の塔は茂みの深い高い崖の上であり、急な崖の下は海になっており、覗くと落ちそうですが、その下を覗き込みながら学徒として沖縄戦を経験したひめゆり平和祈念資料館の島袋館長が、急な崖を伝って海まで降りたことを話され、その場所の記憶を辿ろうとされる場面もありました。

2日目のフィールドワークは、雨の中となりましたが、対馬丸記念館では、園田館長の案内で敷地内にある記念碑をめぐり、その後記念館の設立に関わられた遺族が展示にこめられた思いを語られました。最後に、瀬長亀次郎の活動と彼が残した資料を展示する不屈館を訪れました。不屈館は、沖縄の祖国復帰と平和の実現を目指して戦った亀次郎と民衆の活動を伝えるための資料館で、会員制で民間で維持されています。

今回のフィールドワークは参加者にとって沖縄戦の戦場の凄惨さやその中の矛盾やその継続性、また戦後の沖縄の中で歴史と現実に向き合ってきた営みの一端に触れ、その多様性や課題を感じ取り、平和について検討する上で沖縄という場所や平和博物館をはじめとする活動が積み上げられてきたものの持つ重みについて再認識する機会となりました。

## 第 64 回不戦のつどい「わだつみ像」前集会—平和のたすきを繋ぐ—

第 64 回不戦のつどい像前集会（主催：不戦のつどい実行委員会）が、2017 年 12 月 8 日（金）国際平和ミュージアムロビー（衣笠）にて開催されました。像前集会は、他に 6 日に大阪いばらきキャンパス（OIC）、7 日にはびわこ・くさつキャンパス（BKC）にて開催されました。

「不戦のつどい」とは、立命館大学がかつて積極的に学生を戦地に送り出していたという苦い過去を反省し、大学は『二度と学生を戦地に送り出さない』、学生は『二度とペンを銃に持ち替えない』という反戦・平和の誓いを新たにします。

衣笠キャンパスの「わだつみ像」前集会には、学生、教職員、関係者、市民ら約 150 名が集まり、黙禱に続いて、不戦のつどい実行委員会の出川恵弥委員長（学友会中央常任委員長）が、「戦争の歴史を過去のものとせず、平和についてもつと学び、考えていく必要がある」との決意が表明されました。

続いて、学園を代表して吉田美喜夫総長より、参加者に敬意を表するとの言葉のあと「1943 年学徒出陣によって 3,000 名の本学学生が戦地に赴き 1,000 名は戻ってこなかった。また 20 歳に至らない学生は学徒動員に 3,000 名が参加した。戦争を始めるのは人間です。大学はそのようなことも含め、これか

らどのような選択をするのかを正しく認識できる場とした。立命館はこれからも平和に貢献していきたい。」とのご挨拶がありました。

不戦のつどい実行委員会の院生協議会連合、教職員組合、生活協同組合などに続き、国際平和ミュージアムの加國尚志平和教育研究センター副センター長、田中聡メディア・資料センター長も献花し、不戦と平和への誓いを新たにしました。



不戦のつどいの様子

### 2017 年度後期 NGO ワークショップ開催報告

## 「チョコレート×フェアトレード～カカオ生産の裏側にある児童労働を考えよう～」

日時：2018 年 1 月 11 日（木）18：00～19：30

場所：立命館大学国際平和ミュージアム 2 階会議室

講師：秋吉恵（立命館大学共通教育推進機構准教授）

国際平和ミュージアムでは、平和教育普及活動の一環としてミュージアム学生スタッフ企画によるワークショップを開催しています。例年は NGO 団体より講師を招いていますが、今回はフェアトレード活動やその背景にある社会問題に詳しい秋吉恵本学准教授を講師に迎えての開催となりました。

ワークショップに先立ち実施した事前学習会では、本学フェアトレード学生団体「beleaf」の協力を得て、「フェアトレードとは何か」を学びました。ワークショップ当日は、最初に「これまでどんな基準でチョコレートを選んでいたか」を話し合う簡単なワークを 4 グループに分かれて行い、続くレクチャーでは、チョコレートの原材料であるカカオ豆が国際市場でどのように取引され、生産者はどのような問題を抱えているのか、また世界で最も多い貧困者層分布地域と重なるカカオ生産地帯の児童労働の実態について、データや映像を交えた解説がありました。統計によると世界の子ども（5～17 歳）の 10.4%が児童労働に従事し<sup>\*</sup>、教育を受けられず危険で有害な労働を行い、中には債務を負わされて人身売買的に働かされているケースも

報告されています。こうした状況を変えていくためには、私たちが食べるもの、着るもの、使うもの一つ一つについて「考える消費者になる」ことでしか解決方法はないのではないかとこの立場から、①生産者、②加工製造・販売プロセス、③価格構造（①、②の所得配分）について知り、考えることが必要であるとの認識が示されました。その後、商品を選ぶ「これまでの基準」「これからの基準」「どんな情報をパッケージに載せるか」をテーマにグループディスカッションを行い、各グループの意見を共有しました。学部生・大学院生あわせて 18 名が参加し、「考える時間がたくさんあって深い理解につながった」「グループワークをととても楽しめた」といった感想が聞かれました。

※国際労働機関 ILO 報告（2012 年）



グループディスカッションする参加者

## 「儀間比呂志版画展 — 沖縄への思い —」

会 期：2017 年 11 月 1 日（水）～12 月 23 日（土・祝）

前期 11 月 1 日（水）～11 月 26 日（日）

後期 11 月 28 日（火）～12 月 23 日（土・祝）

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム 1 階 中野記念ホール

参観者：9,121 名

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

後 援：京都府、京都市、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都市内博物館施設連絡協議会、NHK 京都放送局、KBS 京都、朝日新聞社、京都新聞、毎日新聞京都支局、読売新聞社

儀間比呂志氏は 1923 年沖縄に生まれ、18 歳から約 3 年間に北マリアナ諸島テニアン島で過ごしました。徴兵検査のため沖縄へ戻った後、海軍へ配属され横須賀で敗戦を迎えました。戦後の混乱の中、アメリカ軍政下の沖縄へは戻らず、復員列車の終点であった大阪にそのまま居を定めました。

大阪市美術研究所で油絵を研修後、上野誠氏に木版画を学び制作活動を始めた儀間氏は、1956 年から沖縄での取材を重ね、人々の暮らしや祭といった日常風景、沖縄戦やアメリカ軍基地問題などをテーマとした作品を描いてきました。数々の画集や絵本を出版し、各地で展覧会を開催するなど、2017 年 4 月に 94 歳で亡くなるまで沖縄への思いを表現し続けました。

儀間氏の代表作『戦がやってきた—戦争版画集』（中山良彦・文、1979 年、集英社）は、アジア太平洋戦争末期、12 万人以上の県民が犠牲となった沖縄での地上戦を描いています。1970 年代初頭、それまでの軍隊主体の戦記や語りに対し、体験者の聞き取りなどをもとに住民の視点に立った沖縄戦の実相を記録する動きが強まっていました。これら住民の証言は、儀間氏に戦争への憎しみと怒りを抱かせ、ライフワークと

してこの主題を描き続ける原動力となりました。

本展では、一五年戦争において地上戦の戦場となり、多くの住民が犠牲となった沖縄戦、朝鮮人軍夫や慰安婦の存在、戦後のアメリカ軍基地問題などをテーマにした版画作品 68 点を展示しました。展示を通して沖縄戦の実相を知り、敗戦から現在に至るまで沖縄が直面する課題に私たちがいかに向き合うべきかを考える良い機会となりました。

なお、本展は平和への思いから儀間作品を収集していた旧蔵者・奥田豊氏の篤志とご家族ならびに関係ギャラリーのご助力により、そのコレクションが当ミュージアムへ寄贈されたことで実現しました。心より感謝申し上げます。

また、本展開催にあたり儀間氏のご家族をはじめ多くの方々にご協力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。



### 見学者の感想 アンケートより

儀間比呂志という方の名前は知っていましたが、その作品をこれほどたくさんまとめて見るのは初めて。やはり戦争をテーマとしたものは強烈すぎて胸が痛みます。それにひきかえ沖縄の日常をテーマにしたものには心からほっとします。 (70 代以上 無職)

沖縄の歴史を版画を通して学ぶ事ができて大変よかったです。知らない、知らされていないことが、まだまだあるのだということがわかりました。多くの方々に版画を通して沖縄の歴史や、沖縄の人々の思いを知っていただけるとありがたいです。

(50 代 教育関係者)

これまで本などで見てきた儀間氏の作品をまのあたりにして、とても素晴らしいと思いました。精細で力強く、情念が伝わってくるような作品が多く、圧倒されました。 (40 代 会社員)

先月、学校の修学旅行で沖縄に行き、平和と戦争について学びました。映画を見たり、本を読んだり、体験者のお話を聞いたりしましたが、今回、儀間比呂志さんの版画展を見て、また新たな過去を見つめる事ができました。(中略)これを機に、もっとたくさんの悲しく、恐ろしい過去を学んでいきたいと思いました。

(10 代 高校生)

### ■三線演奏会

#### 「南洋諸島で響いた三線の音」

日 時：2017 年 11 月 3 日（金・祝） 14：00～15：30

会 場：国際平和ミュージアム 1 階ロビー

講 師：栗山新也氏（日本学術振興会特別研究員、国際日本文化研究センター所属）

参加者：78 名

儀間氏が旧南洋諸島（北マリアナ諸島テニアン島）の芝居小屋で沖縄の古典芸能にふれた経験があることから、沖縄古典音楽の演奏者で研究者でもある栗山新也氏に三線の演奏と歌を披露していただきました。結婚式などのおめでたい席で演奏する「かぎやで風節（かじゃでいふうぶし）」、儀間氏の絵本『テニアンの瞳—南洋いくさものがたり』（2008 年、海風社）で描かれていた「諸屯節（しゅどうんぶし）」、旧南洋諸島に渡った沖縄の人々がアレンジし演奏した「南洋浜千鳥」とその原曲「浜千鳥節」の 4 曲を演奏していただきました。演奏の合間には、楽器「三線」の特徴、旧南洋諸島への移民とともに伝わった沖縄古典音楽のこと、沖縄口の歌詞の意味などの丁寧な解説があり、儀間氏の作品の背景を思いながら聴くことができました。



栗山新也氏

#### —参加者の感想—

- ・南洋諸島と沖縄が三線でつながっていることを初めて知りました。祖父母が出身の沖縄に思いを馳せることができたひと時でした。（40代 会社員）
- ・生の三線の音色に、心がすうっと晴れるような、心地良い時間を過ごさせて頂きました。栗山先生の声もとても素敵でした。（50代 公務員）

### ■映画上映会 & 監督座談会

#### 『アリランのうた—オキナワからの証言』

（監督：朴壽南、1991年）

日 時：2017 年 11 月 22 日（水） 17：00～19：30

会 場：立命館大学衣笠キャンパス

平井嘉一郎記念図書館シアタールーム

登 壇：朴壽南監督、庵道由香氏（本学文学部教授）

参加者：24 名

この映画は、沖縄戦で犠牲となった朝鮮人「軍夫」や「慰安婦」の実態を体験者の証言映像で伝えるドキュメンタリー作品です。韓国や沖縄で撮影された証言映像には、当時の様子を生々しく語る人、沖縄の地で記憶を確かめる人、加害側となった経験を告白する人など、それぞれの体験した沖縄戦が語られていました。儀間氏はこの映画のポスターのためにアリランを舞う女性と慰安婦の姿を重ねて描いた版画を制作し、その後も朴監督の映画製作に協力してきました。

上映後の座談会では朴監督にご登壇いただき、50年に渡る映画製作を通して表現してきたことや今の若い世代に伝えたいことなどを、会場からの質問に答えながらお話いただきました。



朴壽南監督（左）、庵道由香氏（右）

#### —参加者の感想—

- ・貴重な証言を収めたドキュメンタリーだと思いました。（60代 教員）
- ・戦時中、沖縄で実際の状況を見てきた方々が発言されているので、リアルで当時の状況をつよく感じられました。（20代 学生）
- ・証言の量・質がとても優れている。監督の入っていく力を感じた。（30代 研究者）

## ミニ企画展示

### 第111回

#### 「第11回立命館附属校平和教育実践展示」

会期：2017年10月8日（日）～12月16日（土）  
主催：立命館中学校・高等学校、立命館守山中学校・高等学校、立命館小学校、立命館慶祥中学校・高等学校、立命館宇治中学校・高等学校  
共催：立命館大学国際平和ミュージアム  
展示の詳細は、次項「教える」から「共に考える」へをご覧ください。

### 第112回

#### 「原発設置をめぐる住民投票実現までの軌跡」

会期：2018年1月13日（土）～1月28日（日）  
主催：巻原発住民投票から20年 明日の巻地域を考える会（代表 中村正紀）  
共催：立命館大学国際平和ミュージアム

1996年8月4日、住民3万人余りの新潟市旧巻町で原子力発電所建設の賛否を問う住民投票が実施されました。自治体の条例に基づく全国初の住民投票として注目された投票は、高い投票率（88.29%）で反対票が61%という結果となりました。この結果を重く受け止めた町長は、東北電力と資源エネルギー

庁にそれぞれ申し入れを行い、2003年には東北電力が原発設置計画を撤回しました。

1969年、巻原発の設置計画が明るみに出ると、小さな町は推進派と反対派の激しい対立に揺れました。しかし、一方では住民自らが主体的に町政へ参画し、民意に添った判断を呼びかける運動が盛り上がりました。その運動が「住民投票」によって地域の将来を左右する問題に、住民が直接向き合うという結果につながりました。

本展は2016年夏に新潟市西蒲区で住民投票から20年を記念して開催された「巻原発の発表から住民投票が終わるまで」の展示を中心とし、ミュージアム所蔵のピラなどもあわせて紹介しました。展示を通して、住民一人ひとりの声が社会を動かす力になり得ることを改めて考える機会となりました。



## 「教える」から 「共に考える」へ ～戦争を知らない世代だからこそ、必要なこと～

小笹大道

（国際平和ミュージアム運営委員 / 一貫教育部副部長）

今年で11回目を迎える立命館附属校平和教育実践展示。しかしながら、10年前と今とは児童・生徒の反応が変わっていることに気付かされます。何が大きく違うかを考えたときに、語り部の存在だと答える方も多くおられます。実際、おじいちゃん、おばあちゃんから戦争のことを聞いたと答える児童・生徒は年々減っていき、教科書に載っている歴史上の出来事として捉える児童・生徒が増えています。このようなことを時代の流れとして済ませてしまえば、1945年の終戦も、1600年の関ヶ原の戦いと同じ歴史の一事実となってしまうかねません。だからこそ附属校では今の子ども達に考える機会を与え、試行錯誤を重ねながら、平和教育を行っています。上辺だけでなく、どうやって心の根っこに届けることができるだろうか。児童・生徒に問い、感性に訴えかけ、価値観をぶつけ合う。そんな取り組みの様子を今回も国際平和ミュージアムをお借りして紹介させていただきましたので、以下に報告します。

立命館中学校・高等学校

会期：2017年10月8日（日）～10月20日（金）

テーマ：立命館中学校の平和教育

中学生全員が参加して制作した「平和の地球儀」を展示。地球儀には「身近な平和に感謝したこと」を書いたものが色とりどりに貼られていました。他に、平和をイメージした美術作品、沖縄研修の事前学習レポートを展示し、図書委員と文化委員で作成した平和の絵本の読み聞かせ映像を放映しました。



立命館守山中学校・高等学校

会期：2017年10月22日（日）～11月2日（木）

テーマ：立命館守山中学校・高等学校の平和教育

身近なところから世界を感じる取り組みとして、北緯35度線上の国々を調べた壁新聞を展示しました。またその様子は多くのメディアにも取り上げられました。他に、平和ポスターの



## 事業報告 | 附属校平和教育実践展示

展示、長崎 APU 平和研修レポートの展示、岩井忠熊先生の講演の様子を動画で流すなど、様々な取り組みを報告しました。



### 立命館小学校

会 期：2017年11月7日（火）～11月18日（土）

テーマ：立命館小学校の平和教育

5年生は7月に広島を訪れ、平和学習を中心とした宿泊学習を行い、そこで学んだことや感じたことを1枚のポスターにして展示しました。ポスターには児童の感性が豊かに表現され、それぞれに自分の平和像を描いていました。他に、各学年の立命科の授業で取り組んでいる様子も展示しました。



### 立命館慶祥中学校・高等学校

会 期：2017年11月21日（火）～12月2日（土）

テーマ：戦争がない平和な世の中を

いつまでも残しておきたい私の風景を撮影し、それにまつわるエピソードを紹介。日常が当たり前のように過ぎていく中で、その中にこそ大切なものがあることに気づき、戦争がないこと、平和であることを改めて感じていく生徒の様子を報告しました。また社会科で取り組んだ中学生の作品も展示しました。



### 立命館宇治中学校・高等学校

会 期：2017年12月5日（火）～12月16日（土）

テーマ：憲法70年と立命館宇治の平和教育

第16回東アジア青少年歴史体験キャンプ in ソウルに20名の生徒が参加し、その様子を動画やキャンプ日誌を用いて報告しました。また、憲法70周年記念集会の取組について、発表資料や社会科の取り組み、生徒の気づきなどを冊子にまとめました。また中学生の平和新聞も展示しました。



今年度は、附属校平和教育研究会を4回開催し、その活動の幅を広げ、大学の先生方やミュージアムの職員の方の協力も得て、学び多き一年となりました。特に第2回目は、国際平和ミュージアムで行い、館内を学芸員の方と一緒にまわりながら、児童・生徒がどのような目線にいるのか、どのように工夫すればより理解が進むだろうかと話し合いました。また安斎育郎先生からご講義、大学の先生方からご意見やアドバイスをいただくことで、平和学、平和教育の視野が広がりました。立命館の教学理念である「平和と民主主義」。これをすべての教育活動の軸に置くことから始まるのではないかと考えると、教員自身がこの考えを自分の教育観の軸に置くことが大事なのではなからうか。そんなことを感じさせる研究会となりました。

教える時代から共に考える時代へ変化している昨今、語り部がいらないからできないのではなく、「平和」について大人も子どもも共に考えていく。そんなことを感じさせる取り組みになったように思います。附属校では今後もより充実した平和教育に取り組んでいきたいと思えます。引き続き、皆様からのご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

ある日のガイドから

村上美代子

(国際平和ミュージアム ボランティアガイド・平和友の会)

「平和ミュージアムの考える平和とは何ですか、もう一度教えてください」

2階の学生さんのナビが終わろうとした時のこと、メモを取って聞いていた女の子がはっきりとした口調で質問したのです。

12月の金曜最終日に見学に来た芦屋市立Y小学校の一人でした。100人を超える大団体で、入館した当初は（ん？落ち着きがないかな？）と思わせるような雰囲気でした。しかし見学が始まると、2階に行くグループ、地階に行くグループとそれぞれに関心のあるところから自主的に見学し始め、何人ものガイドさんの話に熱心に耳を傾けていました。

空襲・原爆の展示のところでは、修学旅行で広島へ行き、そこで見たことや被爆者の方から聞いた話などを、一生懸命私に話してくれる女の子もいました。また、地域のお年寄りから聞

いたという芦屋の空襲についても話してくれました。そして、ロビーでの最後の挨拶では、代表の子が、見学して感じた思いを含めながらお礼の挨拶をしてくれたのです。今年最後のガイドが気持ちよくできたことをガイドみんなで共有して終わることが出来ました。

この子たちの気風はどこから？と思い、後日学校のホームページを見て納得しました。そこには12月8日の全校平和集会の様子や、児童会選挙の様子が写真と共に掲載されていたのです。平和集会では、「原爆と人間は共存できない」「2度と原爆を使ってはいけない！」「今の平和を守ることが若い人たちの務めです」などの言葉が地域の方のお話を聞く児童の写真と共に書かれていました。

また、児童会選挙をしている風景にも驚きました。確か30年程前までは京都市の小学校でも行われていた児童会行事の一つでしたが、今は絶えて久しいです。意欲ある児童が立候補し、全校児童の前で演説をし、投票して選ばれる。一連の民主的な過程の写真には胸が熱くなるものがありました。

「また来年もお越しください」とお送りすると、「もちろんです！」と元氣よく帰って行かれた先生の笑顔、子どもたちの笑顔に力をもらい、これからも来館者の皆さんと一緒に平和への道を拓くガイドをしていきたいと思っています。

入館者状況 (2017年10月～2018年1月)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	合計
開館日数	25	25	26	26	26	19	27	24	20	23	241
入館者数	2,102	3,961	4,240	2,936	2,628	2,474	10,818	6,845	3,029	—	39,033
累計(開館当初からの入館者数)											1,064,960
特別展	9/21～12/23	特別展「世界報道写真展 2017 — WORLD PRESS PHOTO 17 —」									991
	9/21～10/1	滋賀会場：立命館大学びわこ・くさつキャンパスエポックホール									
	10/3～10/27	京都会場：立命館大学衣笠キャンパス中野記念ホール									8,776
	10/30～11/12	大分会場：立命館アジア太平洋大学 A 棟コンベンションホール									2,021
	11/1～12/23	ミュージアム開館 25 周年記念・2017 年秋季特別展「儀間比呂志版画展 一沖繩への思い」									9,121
ミニ企画展示	9/12～10/4	第 110 回「京都の伝統産業と戦争—陶磁器の活用をめぐる」									—
	10/8～12/16	第 111 回「第 11 回立命館附属校平和教育実践展示」									—
	1/13～1/28	第 112 回「原発設置をめぐる住民投票実現までの軌跡」									—
講演会ほか	10/5	特別展「世界報道写真展 2017」関連企画 ・講演会「なぜフォトジャーナリストは現場に向うのか：南スーダン難民は今」 講師：川畑嘉文氏（フォトジャーナリスト） 対談：岩田拓夫氏（立命館大学国際関係学部准教授）/ 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム									23
	10/14	・「竹中真ジャズピアノコンサート—変えられた運命」演奏者：竹中真氏（ピアニスト、作曲家）									50
	11/3	ミュージアム開館 25 周年記念・2017 年秋季特別展「儀間比呂志版画展 一沖繩への思い」関連企画 ・三線演奏会「南洋諸島で響いた三線の音」 演奏者：栗山新也氏（日本学術振興会特別研究員・国際日本文化研究センター所属）									111
	11/22	・映画上映&監督座談会「アフリカのうた—オキナワからの証言」 登壇：朴壽南氏（映画監督）、庵泊由香氏（立命館大学文学部教授）/ 平井嘉一郎記念図書館シアタールーム									78
	12/2	・公開シンポジウム「沖繩戦の後を生きる」平和教育研究センター主催・同志社大学（奄美・沖縄・琉球）研究センター共催 パネリスト：富山一郎氏（同志社大学グローバル・スタディーズ研究科教授、奄美・沖縄・琉球）研究センターセンター長） 謝花直美氏（沖繩タイムス編集委員）森亜紀子氏（同志社大学 日本学術振興会特別研究員）									24
	12/6	京都・欧州人権セミナープロジェクト 平和人権連続講演会「ジョン・コルトレーンと平和人権」平和教育研究センター主催 講師：藤岡靖洋氏（ジョン・コルトレーン研究家、『コルトレーン・ホーム』保存役員）/ 創思館カンファレンスルーム									54
	12/7	京都・欧州人権セミナープロジェクト 平和人権連続講演会「ドイツ・ヨーロッパにおける難民問題」平和教育研究センター主催 講師：Dr. Werner Köhler（大阪・神戸ドイツ連邦共和国総領事館総領事）/ 学而館 401 号									114
	12/9	第 16 回平和のための博物館市民ネットワーク全国交流会 特別講演「ダークツーリズムとミュージアム—戦争と平和を考える—」平和教育研究センター主催 講師：井出明氏（追手門大学経営学部マーケティング学科教授）									70
	12/10～	The Nobel Peace Prize Exhibition 2017 "Ban the Bomb" 国際平和ミュージアム収蔵資料の展示 / ノーベル平和センター、ノルウェー									56
	12/16	第 6 回メディア資料研究会「人びとと原子カー—立命館大学共生社会研究センター所蔵資料から—」 報告者：平野泉氏（立命館大学共生社会研究センター）									オープン
	1/11	後期 NGO ワークショップ「チョコレート×フェアトレード～カカオ生産の裏側にある児童労働を考えよう～」 講師：秋吉恵氏（立命館大学共通教育機構准教授）									11
	1/18	京都・欧州人権セミナープロジェクト 平和人権連続講演会 "Global Constitutionalism and Human Rights" 平和教育研究センター共催 講師：Prof. Mattias Kumm (NYU) / 平井嘉一郎記念図書館カンファレンスルーム									23
	1/27	映画《SHOAH ショアー》上映会（後援）/ 立命館大学朱雀キャンパス									118

※会場記載のないものは、すべて国際平和ミュージアムにて開催

編集後記

昨年観た映画の中でも、第二次世界大戦や現代の紛争とその時代を描いた作品が数多くありました。最も印象に残ったのは、ジョージア（グルジア）の映画「とうもろこしの島」と「みかんの丘」の二本です。作物を育てるという人間の根源的な営みと隣合わせで時折聞こえてくる銃声や兵士たちの姿、日常と非日常が交錯する現代の紛争とそこに生きる人々の生と死を雄大な自然の中に描ききった余韻の残る作品でした（※アブハジア紛争）。

**KYOTO**  
**GRAPHIE**  
international  
photography festival

## 2018 年度春季特別展 ヤズディの祈りー林典子写真展ー KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭 2018 アソシエイテッド・プログラム

### 開催趣旨

ー2014年8月3日、私たちの村にダーシュが侵攻してきましたー

写真集『ヤズディの祈り』より

フォトジャーナリスト、林典子氏による少数民族ヤズディの写真展。独自の宗教をもち主に中東地域を本拠地として暮らしていたヤズディは、イスラム過激派組織 IS によって多数が殺害され、多くの女性が性奴隷にされる惨劇にみまわれました。写真集『ヤズディの祈り』より、人々の望郷の思いと未来へと生きる姿をとらえた作品の数々を紹介します。

日本からは遠い異国の物語としてではなく、人々の暮らしに寄り添う作家独自の視点からとらえた作品を通して、現代を生きる一人ひとりにとっての平和について、思いをめぐらせてください。

林 典子 Hayashi Noriko (1983ー)

国際政治学、紛争・平和構築学を専攻していたアメリカでの大学時代に西アフリカのガンビア共和国を訪れ、地元新聞社「The Point」紙で写真を撮り始める。以後、国内外での取材によって、ニュースにならない人々の物語を伝える。

IS により襲撃される悲劇にみまわれた少数民族ヤズディの日常によりそい、独自の視点で写しとった写真集『ヤズディの祈り』(赤々舎)では、石橋湛山記念早稲田ジャーナリズム大賞(第17回)、山本美香記念国際ジャーナリスト賞(第4回)を受賞。フォトエージェンシー「Panos Pictures」(ロンドン/イギリス)所属。

### 企画概要

会 期：2018年4月14日(土)～7月16日(月・祝)

開館時間：9:30～16:30(入館は16:00まで)

毎週金曜日 Friday Night Museum を実施、

特別展のみ 19:00まで延長(入館は18:30まで)

休 館 日：月曜日(ただし7/16は開館)

会 場：立命館大学国際平和ミュージアム1階・中野記念ホール

参 観 料：大人400円(350円)、中・高生300円(250円)、小学生200円(150円)

( ) 内は20名以上の団体料金

※常設展見学可

※国際博物館の日(5/18・19・20)は無料公開

※KYOTOGRAPHIE 共通パスポート提示で当写真展のみ1回限り無料

主 催：立命館大学国際平和ミュージアム

協 力：赤々舎、松本工房、KYOTOGRAPHIE 京都国際写真祭

後 援：京都市、京都市教育委員会、京都市教育委員会

京都市内博物館施設連絡協議会、KBS京都、朝日新聞社

京都新聞、毎日新聞京都支局、読売新聞社

助 成：公益財団法人 花王 芸術・科学財団

### オープニングイベント林典子トーク

4月14日(土) 13:00～15:00(国際平和ミュージアム1階ロビー)

登壇：林典子氏(フォトジャーナリスト)

竹中悠美氏(立命館大学大学院先端総合学術研究科教授)

※イベントの参加は無料・申込不要。詳細はHPにて。



カディア・キャンプ、イラク ©林典子



カルセ、シンガル山、イラク ©林典子

## 世界報道写真展 2018 —WORLD PRESS PHOTO 18—

京都会場(立命館大学国際平和ミュージアム)

会 期：2018年10月6日(土)～10月28日(日)

休館日：10月9日(火)、10月15日(月)、10月22日(月)

滋賀会場(立命館大学びわこ・くさつキャンパス)

会 期：2018年10月30日(火)～11月11日(日)(会期中無休)

大分会場(立命館アジア太平洋大学)

会 期：2018年9月16日(日)～10月3日(水)(会期中無休)

世界報道写真展は、オランダに本部を置く世界報道写真財団が毎年開催している世界報道写真コンテスト入賞作品で構成した写真展で、今年で61回目を迎えます。立命館大学では、1995年より毎年開催しています。

この地球上で起きているあらゆる出来事を、最高の技術と取材力をもって撮影した写真は、人々に現実を強く訴える力を持っています。世界の現状を知り、いま一度、平和とは何かを考えるきっかけにしたいと大きく開催するものです。



世界報道写真展 2018「一般ニュースの部 組写真」

イヴォール・ブリケット

アイルランド、ニューヨーク・タイムズに提供

世界報道写真大賞 候補作品

2017年7月12日

イラク軍特殊部隊の兵士によって手当てをうける身元不明の男の子。モスル奪還をめぐる戦闘では数千におよぶ市民が殺され、街の大部分が廃墟と化した。

詳細はホームページでお知らせいたします。

## INFORMATION

### ミニ企画展示室

第113回

#### 第23回京都ミュージアムロード参加企画 「占領期の京都」

会期：2018年2月10日（土）～3月25日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

内容：1945年8月、敗戦により大日本帝国が崩壊し、戦時体制が解かれるとともに、戦争に関わる証拠の隠滅や占領軍受け入れの調整がはじまりました。同年9月には京都へも米軍が進駐し、おもに西日本の占領の拠点とされました。本展では、収蔵資料を中心に占領期の京都の様子を伝える写真などを展示します。



1947年8月京都にて 休暇中の英連邦軍の兵士たちが映画ポスターについて話している様子（オーストラリア戦争記念館蔵）

第114回

#### 「熟覧Ⅲーメディア資料室への誘いー」

会期：2018年4月1日（日）～4月22日（日）

主催：立命館大学国際平和ミュージアム

内容：国際平和メディア資料室の魅力を伝える企画の第3弾。ミュージアム学生スタッフが選ぶおすすめの図書や収蔵資料を紹介します。



2017年度の展示

第115回

#### 「私のレンズを通して見た、占領下のパレスチナ」 Occupied Palestine Through My Lens

会期：2018年4月28日（土）～5月20日（日）

主催：特定非営利活動法人アースキャラバン

内容：イスラエルに土地を奪われ続けるパレスチナ。そこにくらす人々の日常を、パレスチナ人写真家が住民の目線で伝えます。



「ノスタルジア」撮影ハイサム・ハーティブ

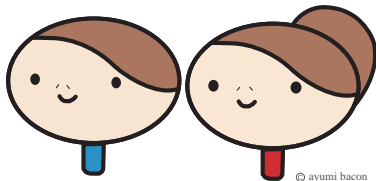
### 夏休み子ども企画

#### 「へいわ」ってなに?? 2018

2018年7月28日（土）

夏休みに見て・感じて・考えて! 平和について一緒に考えましょう!!

国際平和ミュージアム名誉館長による平和のお話を聞いたり、大学のお兄さん、お姉さんと一緒に平和について考えてみませんか? 夏休みの自由研究にも役立つ企画を予定しています。



© ayumi bacon

### 教員向け見学説明会

2018年7月25日（水）～27日（金）

8月21日（火）～23日（木）

夏休み期間に小学校・中学校の教職員を対象とした見学説明会を開催します（無料）。安齋名誉館長による平和講義体験、ボランティアガイドの案内による見学、学習教材キットの紹介、個別見学相談会を行います。

\*6/26（火）

申込受付開始



昨年の様子

立命館大学国際平和ミュージアムだより

第25巻第3号（通巻73号）2018年3月2日発行

編集・発行 立命館大学国際平和ミュージアム

〒603-8577 京都市北区等持院北町56-1

TEL: 075-465-8151 / FAX: 075-465-7899

<http://www.ritsumei.ac.jp/mng/er/wp-museum>



日本平和博物館会議  
JAPAN ASSOCIATION OF MUSEUMS